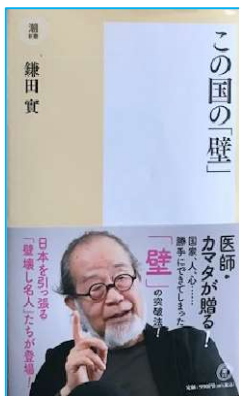


絵本の力

やなさん(ペンネーム:機械科39年卒業)



この関東コラム(2024年2月19日)に、八代亜紀さんの遺作絵本となった「ちーさんとあきちゃん」についての記事が掲載された事を、皆さん覚えていらっしゃいますか？

その時ふと脳裏をかすめたのが、鎌田實さんが書いた「この国の『壁』」という本(2023年4月20日潮出版社)です。この本に「絵本は人生に三度の楽しみ」という、ノンフィクション作家の柳田邦男さんの名言が紹介されていました。

それは「絵本には第1に母親から読み聞かされた時や自分で読んだ時の絵本、第2に子供に読んであげた時の親としての絵本、第3に中高年になって人生経験のある程度積んだ時に読む絵本と、三回の楽しみがある」というのです。これを読んだ時、知人が出版した「よっちゃんのクレヨン」という大切に保管していた一冊の絵本がある事も思い出しました。



この本は、中学2年生の時に膠原病が判明した少女が、入退院を繰り返しながらも高校デザイン科に入学し、闘病中に講談社主催の「絵本新人賞」に応募した時の絵本で、その原画を使用しています。応募の結果は残念でしたが、

16歳という若さで亡くなった娘さんのこの遺作を、ご両親が自費出版したのです。

絵本のストーリーを簡単に紹介します。

よっちゃんは誕生日に両親から不思議なクレヨンをもらう。赤い色でイチゴを描くと本物のイチゴが本から飛び出す。紫色のブドウを描くとブドウがという具合だ。

遊びに来た動物たちの求めに応じ、イチゴやブドウをあげてしまう。残ったのは黒いクレヨンだけ。「美味しいものが描けないよう」と泣いてしまう。良い事を思いついた。それは大きな花の種を描く事。やがて種は芽を出しきれいなひまわりの花が咲く。その花の上で動物たちとパーティーをするという話。

この絵本は細部全部を読み切らなければ、実感できないと思いますが、絵本の第3の楽しみと、どの様に対応したらよいのか、どう読み取れば良いかを色々教えてくださいました。

明るいい色を使って描いた果物は、病が快方に向かうかもしれないという、闘病中での希望の気持ちを表す。黒色のクレヨンを使って描いたヒマワリの種は、病の回復の限界に気づき、自問自答する気持ちを表す。やがてそのヒマワリの種は育ち花を咲かせ、そこで皆と楽しく遊ぶことができると考え、失望の中にも希望を持ち続けるという気持ちが大切なのだ、と自分に言いかけさせる事を表したものである。私はこの様に物語の楽しみを理解してみました。

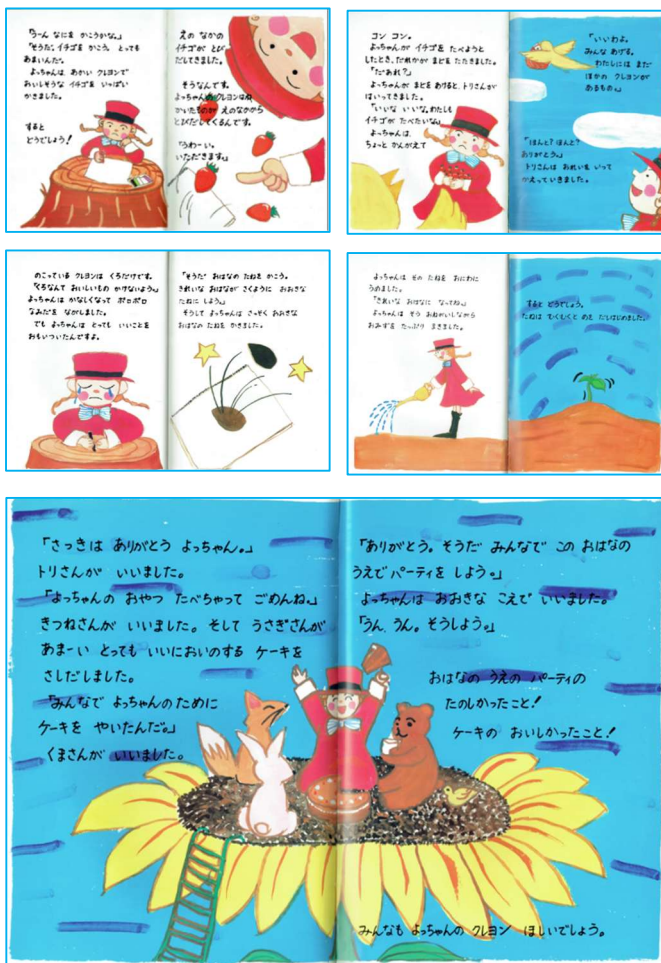
確かに絵本を読み、「きれいな絵だ」「面白い本だ」という簡単な思いは直ぐに浮かびます。しかし絵や物語の中に潜んでいるストーリーは奥深く、多分、読者により解釈は千差万別かもしれません。

この様に絵本を読めば、それが単なる子供の絵本ではなく、大人はそこから作者の意図する奥深い内に潜んでいる想いが理解できると思います。作家柳田邦男さんがいう、正に第三の絵本の楽しみがあるという事ではないでしょうか。

私には白血病を患い、余命 5 年を宣告され、現在余命2年を切った友人がいます。彼はよく本を読みます。読み終わると、「こんな面白い本があった。読んでみる？」と、時々送ってきます。冒頭に紹介した「この国の壁」の本も彼が送ってくれた本です。

彼に、この「よっちゃんのクレヨン」について話したところ、その絵本を是非貸して欲しいとの依頼がありました。そして絵本を読んだ後、自費出版されたお母さんに、この絵本を世の中に出して頂いた感謝の手紙を書きたいと言ってきました。

この物語の最後に残った黒色のクレヨンの意味と、自身の余命を重ね、自分も、どの様にこれから生きていけばよいかのヒントをもらったというのです。その事へのお礼をしたいと言うのです。絵本がこれほど人を結びつけ、感激させる力がある事を改めて考えさせられました。皆さんも是非絵本をお子さんやお孫さんに読んであげながら、自分でも、もう一度読んでみたいかがでしょうか。絵本にはこの様に本当に強い力があるのです。



絵本の一部を載せる事は発行者に承諾を得ています



文: やしろあき 絵: ひまり(14さい)

この絵本「ちーたんとおきちゃん」は茂木さんがHPで紹介した絵本です。イラストを描いている「ひまり」さんが茂木さんのお孫さんです。

この絵本は八代亜紀さんが「保護ネコ活動」という社会活動の一環として出版されたもので、収益金は団体に寄付されているそうです。私も一冊購入しました。偶然にも八代亜紀さんは、「よっちゃんのクレヨン」を書いた小林千恵ちゃんと同じ難病の膠原病で亡くなられたのです。

ご冥福をお祈りします。